

31 所沢市における障害者の災害準備対策：5年目の進展

研究所障害福祉研究部 北村弥生、学院 関剛規、総務課 伊沢功次、園田悦子、
所沢市自立支援協議会 小内正秋、所沢市危機管理課 神尾久、所沢市障害福祉課 土戸祐也

【はじめに】地域における災害時の準備のために、平成24年から所沢市において、市役所、社会福祉協議会、まちづくりセンター、自主防災組織、町内会、当事者、支援者らと防災勉強会、地域防災訓練への障害者の参加を行っている。5年目の平成29年には所沢市社会福祉協議会会員を対象とした障害者の防災に関する研修を実施したので、その内容を報告する。

【方法】研修は講演（北村、1時間）と避難所運営ゲームHUGの改変版（危機管理課、2時間）から構成した。参加者合計64名、うち障害者5名（電動車いす1名、手動車いす1名、全盲1名、弱視1名、ろう1名）で、電動車いす利用者（24時間ヘルパー）、全盲者（同僚がガイドヘルプ）、ろう者（手話通訳者2名）に補助した。8グループに分かれ、市立小学校（3グループ）、通所障害者施設（3グループ）、国リハ（2グループ）の敷地図を使い、用意されたカードに書かれた避難者および受付・掲示板・仮設トイレの配置を決めた。避難者カードの一部は、参加した障害者をモデルにした事例に差し替えた。最後に、障害のある参加者から配置に関する希望の発表を得て、グループの決定との差異を確認した。準備には、社協、障害福祉課の協力も得た。

【結果】1. 障害のある避難者の配置に関しては、下記が示された。

- ① ろう者は体育館でよいことは、本人の希望とグループの決定が一致した。
- ② 車いす利用者には、本人は多くの目が行き届く場所を希望したが、グループは個室を提供する配慮をし、食い違った。
- ③ 視覚障害者は「慣れた場所」として国リハの中で自分が使用したことがある教室を希望し、グループでも受け入れられたが、連絡方法は考えられていなかった。
- ④ 自己注射が必要な参加者は、薬に関する要望を持ちながら、ゲーム中に解決策を見出すには至らなかった。

2. ゲームの原型では250事例を議論するが、この日は34世帯しか議論できなかった。

3. 障害のある参加者は、すべて、自分の希望は発言できた。しかし、運営について下記の課題が示された。

- ① 電動車いす利用者はテーブルに近づくことができず、「マイクの音声があると、グループ内の声が聞こえにくかった」と述べた。
- ② 全盲者には「参加者が全員、避難所運営者である」という前提が理解しにくいこともあり、伝わっていなかった。
- ③ ほとんどが初めての参加であったため、ボランティアによる補助を行う余裕はなく、弱視者への補助はなされなかった。

【課題と今後の展開】配置、補助者、事前の説明などの設定の変更と解決事例の蓄積により、さらに参加者の満足度と災害時の準備を向上させる工夫を検討する予定である。